

平成28年度 兵庫県立こぼと聴覚特別支援学校 学校評価

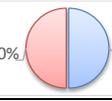
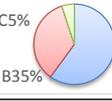
学校経営の重点【学校教育目標】

- (ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。
- (イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。
- (ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
- (エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。
- (オ) 豊かな生活体験を通して基本的生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善および自立と社会参加を目指す人間性の素地を培う。
- (カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

評価基準 A 達成している ■ B おおむね達成している ■ C あまり達成していない ■ D 達成していない

学部・分掌	学校経営の重点		学校評価		
	各部の実践目標	成果と課題	各部評価	校内評価	校内評価のグラフ化
保育相談部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。				
	昆虫等の生き物に触れる体験や畑の野菜を収穫する体験を増やし、動植物に対する興味・関心を育てる。	カタツムリ・カエル・カマキリ等を教室で飼ったり、虫とりを親子で楽しむことで、ほとんどの子どもが生き物に興味を持つようになった。また、こぼと農園で野菜を収穫する体験が家庭での活動にもつながった。	A	A	
	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。				
	親子のコミュニケーション場面のビデオを保護者と一緒に見て、難聴児への関わり方について具体的なアドバイスを行う。	親子の関わりをビデオに撮り、振り返ることで、視線を合わせたり、子どもの興味に沿った働きかけをする等、基本的な関わり方について気付くきっかけとなった。助言は日々の保育の中で具体的に伝え、1年が終わって関わり方に大きな変化が見られたケースもあった。	B	A	
幼稚園部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。				
	異年齢教育の機会を確保するため、毎月2回以上なかよしあそびの時間を設ける。	4、5歳でのあそびを含めると月2回程度取り組むことができたが、3学年でのなかよしあそびは行事の関係等で確保し切れなかった。	B	B	
	なかよしあそびの内容を検討し、幼児が主体的にあそびに参加できるようにする。	色鬼や地蔵鬼、ハンカチおとしなど、ルールのあるあそびを順次導入した。子どもが主体的に選ぶことができるようによりあそびの数を増やしていきたい。	A	B	
	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。				
	担任及び自立活動担当による個別指導の時間を原則週1回設定する。保護者へ指導の意図や子どもの課題を伝える時間を確保する。また、自立活動担当と担任の連携を密にして、充実した個別指導を目指す。	担任、専科の個別指導の回数を確保することができた。リズム専科と担任との連携はできていた。保護者発音専科と担任との連携をもう少し密にし、担任も発音指導ができるようにしていきたい。	B	B	
総務部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。				
	文化的活動や社会施設体験、自然体験などの体験活動を工夫して、幼児の全人的発達を促す。	遠足では、数年同じところに行っているため、検討してもよいのではという意見体験活動や節目の儀式等を重視し、企画・運営を行った。行事内容のさらなる精選を進める。	B	A	
教務部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。				
	一人一人の幼児の実態を的確に把握し、幼児の障害の状態や発達の程度等に応じたより効果的な指導が行えるよう、幼稚園の個別の指導計画を見直す。	幼稚園と連携し、幼稚園教育要領の5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)及び自立活動のねらいと内容を意識し、一人一人の障害の状態や発達段階等に即した目標を設定し、指導内容・方法を工夫し指導が行えるよう見直しをした。併せて、保育相談部通知表の様式も見直しをした。また、個別的教育支援計画についても、実態把握、合理的配慮事項、引継ぎ及び活用方法を明確にするため、様式の見直しをした。次年度からの運用が課題である。	B	A	
	校務・業務の効率化を目的に、各種様式の統一化・電子化を検討していく。	指導要録の電子化をし効率化を図った。また、幼稚園の個別の指導計画の見直しに伴い、次年度から指導計画を通知表として保護者に提供することとなった。保護者に対し幼児一人一人の目標・指導方法等を説明し、保護者と連携して指導の充実を図っていく。	A	B	

	(カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
相談センター部	地域の保・幼、小・中高等学校において、難聴児に対する理解と支援の充実を目的に、教員等を対象に研修会や事例検討会等を行う。	平成27年度で文科省の特別支援学校のセンター的機能充実事業は終了したが、今年度は校内で予算化し、引き続き地域の学校園等への支援を行うことができた。初めて高等学校で校内研修会を実施するなど、少しずつ本校の取組が周知されるようになり、教員等の難聴児教育に対する理解と支援の継続につながった。	A	A	
	保護者、地域の方々に対し、特別支援学校のセンター的機能として実施している取組等を紹介するために、便りを発行したりホームページに活動内容を掲載したりする。	校内向けの便りは年間4回の発行、地域支援の内容や子どもとの関わり方等を紹介した。またホームページには、保健師対象研修・連絡会の様子などを掲載した。さらにホームページ等を活用して情報発信していく必要がある。	B	B	
	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。				
研究部	(授業研究) 全教員が研究授業を行い、子どもが生き生きと主体的に活動する保育内容であるか、子どもの表出を捉え適切な支援をしているか、教師の働きかけが個々の子どもの発達に合っているか、などを検討し、指導力を向上させる。	外部講師を招聘し、授業研究を計画通り実施しすることができた。授業者にとっては、日々の保育に生かせるようなアドバイスを受け、教員同士の意見交換や共通理解に繋がった。今後も継続し一層の指導力向上を目指したい。	A	B	
	(研究) 幼稚部・保育相談部の研究を通して、幼児の実態の把握や保育・発達支援のあり方を研究する。	幼稚部は「あそび」の研究を通して縦割りや遊ぶ時間やあそびのレパートリーを増やし、子どもが主体的にあそびを選択できることをねらった。外部講師助言や幼稚園見学で学んだことを活かし、子どもの発達や年齢に合わせた支援や環境構成など教師の適切な支援の在り方や関わりについて一層研鑽したい。保育相談部は、親子の活動をビデオに撮影し、保護者の子どもへの働きかけについて細かく分析した。母親と一緒にビデオを見ながら、子どもとのコミュニケーションを活発にするための助言を行った。	B	B	
	(職員研修) 聴覚障害児教育に関する最新情報を発信する研修を行い、教員の専門性の向上を図る。	聴能・幼児の発達・具体的支援・手話・人工内耳の最新情報等の内容で年間18回の職員研修を行った。うち10回は外部講師を招聘して実施した。今年度は手話研修の回数を昨年度の倍に増やし、夏休みの集中講座も行った。今後も新しい情報を取り入れ、専門性の向上を図れるように研修の内容を吟味し、実施していきたい。	A	A	
	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。				
研究部	(保護者研修) 幼稚部・保育相談部の保護者研修を推進する。幼稚部・保育相談部の全体の保護者研修では、聴覚障害に関する研修以外の「幼児の発達」及び「発達障害」等の研修を取り入れ、より良い親子関係が築けるように支援する。	「子どもの発達」の研修では、聴覚障害児の発達だけでなく幼児期の幅広い子どもの発達を理解や関わりについて情報を提供することができた。また、初めて卒業生の親子を招いての研修を実施し、在籍保護者が改めて聴覚障害児の将来像、親子関係や子育てについて考える機会をもつことができたと考えている。来年度も子どもの理解、関わりや子育てに関する保護者研修を企画したい。	A	A	
	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。				
生活・保健部	季節や行事に配慮した給食や食に関わる体験的な活動を実施し、幼児の食に関する興味や関心を育てる。	季節や行事に配慮した献立を実施した。「月のテーマ食材」を設け、それに関連した献立作成を行い、「献立表」に記載することで、幼児の給食への関心を高める工夫をした。また、調理体験(クッキング)だけでなく、季節ごとに野菜を栽培し、食するまでの一連の活動を行ったクラスもあり、進んで食べようとする気持ちを育てることにつながった。今後は、食に関する掲示にも工夫をしたい。	B	B	
	幼児が季節感を感じ、掲示物に触れて操作したり、経験に即して話をしたり等、関われるように、玄関や階段横の壁面構成を工夫する。	季節の自然物や行事を素材にした壁面を毎月製作し、掲示した。壁面を見て、月や季節が変わったことを保護者が子どもに伝える様子が見られた。玄関には操作して遊ぶことができる壁面を掲示した。子どもはよく遊んでいたが、一人で遊んでいる場面も見られた。親子でやりとりしながら一緒に楽しむように、保護者に伝えていくことが次年度の課題である。	A	A	
	(オ) 豊かな生活経験を通して基本的な生活習慣の確立を図り、障害に基づく困難の改善および自立と社会参加を目指す人間性の素地を培う。				
	交通安全指導や火災及び地震避難訓練を通して、事故を未然に防ぐ方法や災害時の適切な行動について、幼児に理解させる。	火災、地震の避難訓練では災害発生時の約束を写真や紙芝居等を使用して知らせることができた。また、今年度は「うさちゃんクラブ」による交通安全教室を実施し、チャイルドシートの必要性や道路の歩き方、横断歩道の渡り方について親子で体験することができた。舞子高校との交流教育(地震と津波のお話)については、内容や教材等について事前に打ち合わせ、検討した上で実施していきたい。	B	A	
健康について(弱視の予防、感染症の蔓延防止等)、学校医・保護者と連携し、幼児期に必要な健やかな成長・発育を促す。	弱視の予防について、学校医・保護者と連携し早期発見・早期治療につながった。保健指導では、手洗い等感染症予防に取り組んだ。	B	A		

(エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。					
情報部	絵本のよみかかせ等を通して、親子で絵本を読む習慣作りにつなげ、図書を活用を活発にする。	月に2回程度、よみかかせを実施し、新しいジャンルの絵本に触れる機会となった。よみかかせで読んでもらった本を図書室で借りるなど、親子で絵本を楽しめた。	A	A	 B32% A68%
	(カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓蒙を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
自立活動部	ホームページを随時更新し、行事や本校の早期教育の魅力を発信する。	行事や保育を紹介するページを月に2、3回作成した。ホームページを見て教育相談に来校したケースもあった。	A	A	 B50% A50%
	(イ) 一人一人のニーズに応じた教育を行う。(エ)聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。(オ) 障害に基づく困難の改善および自立と社会参加を目指す人間性の素地を培う。				
自立活動部	補聴援助システム(ロジャー)や線音源スピーカーを導入・設置し、音環境の整備を行い、機器を有効に利用する等、幼児の聴覚活用を促す工夫を行う。	補聴援助システム(ロジャー)や線音源スピーカーを設置し音環境の整備を行った。それらについて有効に利用できるよう教員・保護者研修を実施した。実際に使用して分かった課題を整理し今後につなげたい。	B	A	 C5% B35% A60%
	基礎的な言語の獲得、保護者への啓蒙をすすめるため、自立活動だより(聞こえの部屋だより)を定期的に発行し、聴能、発音、音楽リズムのそれぞれの視点から情報を発信する。	聴能、発音、音楽リズムのそれぞれの視点から情報を発信することができた。内容について再考・精選し今後のより質の高い情報発信につなげたい。	A	A	 C5% B45% A50%

学校関係者評価

- ・教育の充実のため、幼児の発達や課題等について保護者と教員がさらに共通理解を図っていく必要がある。
- ・在籍児の教育だけでなく、様々な理由で通学できない難聴児や、難聴について十分な知識や理解のない保護者等に対しても支援の充実をお願いしたい。
- ・聴覚障害だけでなく、様々な発達の課題のある幼児に対する教育についても専門性を高めていく必要がある。
- ・教員の言葉かけや幼児との関わり方から、教員が幼児の主体性を大切にしようとする意識の高まりを感じる。
- ・これまでの通知表は子どもの成長や発達の様子などが分かりづらいなどの課題があったため、一人一人の目標や支援方法などを明示した次年度からの様式の変更に期待したい。
- ・幼児が自然など周囲に存在する環境に直接かかわることのできる活動が大切であり、そこから幼児は多くのことを学ぶことができる。
- ・幼児の言葉やコミュニケーション能力の発達のためには、教員も場に応じた適切な言葉遣いや表現の工夫、聴覚口話や手話などの指導の充実が大切である。
- ・学校の様々な活動や取組などの情報を、ホームページ等を通じてより多く発信してほしい。
- ・地域の社会教育施設等の利用をはじめ、防災教育やキャリア教育なども意識した学校だけではできない体験も教育活動に取り入れてほしい。